

傍聴記

10年後の自分と、京都のまちの、
ミライとモンダイを考える。

京都市基本計画審議会

レポーター 松村 幸裕子さん

教育と福祉が手を取り合うことで、当事者を取り巻く環境が変わっていくのではないかと考える26歳。京都に生まれ育った教育系の大学院生。

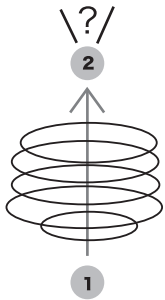


第6回すこやか部会

開催日：平成22年7月22日(木) 会場：京都御池創生館
主な議題：基本計画第2次案の検討について(子育て支援、学校教育、生涯学習)

POINT

1

施策の中に
今までの議論の反映を

第2次案となり、各分野の政策も具体的な表記がなされた資料が提示されましたが、第1次案の時に検討したものを施策に反映すべきではないか、という意見が相次ぎました。例えば、「生涯学習の分野において、基本方針に「社会を創造していく」という表現があるが、この趣旨が施策で反映されていない」、といった意見です。

会議の
ポイント

POINT

2

わかりやすさを重視
市民に届ける目線を

これまでも文章表記についての指摘が多くありましたが、第2次案になり、より市民の目に触れることを想定して、わかりやすい文章にするための工夫が必要、との指摘が相次ぎました。例えば、「今後一層の連携・協働を進める」とあるが、何と何の連携を図るのか、「家族規模の縮小といったことも含めて、核家族と定義しているのか」などの意見です。

会議を傍聴して思ったこと

第1次案でのパブリック・コメントが反映されたという第2次案ですが、細かい文言等の修正は入ったものの、第1次案からはさして変わらずといった印象を受けました。また、審議委員からの指摘も多々ありましたが、推進施策も具体性があるようでない表記が多く、これで果たして計画を実行していくことができるのか疑問に思いました。それから、第1次案審議時に意見として出された、老いや死の教育について言及されていないことも残念です。より先進的な取組をしている京都であるならば、新たな教育の概念、新たな子育て支援の概念をつくっていきけるのではないのでしょうか。

第2次案になり、各重点戦略の中に「市民と行政の役割分担と共汗」の図式が設けられましたが、行政の側からだけが考える役割分担にならないか、不安に思います。市民の主体的な動きを求める比率が高い今回の計画は、行政の行動計画は明記されていますが、市民が能動的になる支援のあり方が明示されていないように感じます。これまでとは違う新たな行政のあり方を計画の中で打ち出していくからには、これまでより計画内容について市民に周知することが必要だと感じます。そのためには、行政がこれまでよりも市民目線になっていくことが求められると考えます。

京都の未来に向けた提案

今年は10年に一度の、京都市の10年後を考える年です。
市政をよく知り、よく考え、利用し、参加し、仲良くなろう

